小路地区上空写真

雲仙市文化財調査報告書　第 17 集

kujiiseki

小路遺跡 II

－雲仙市内各種開発事業に伴う発掘調査報告－

2018
長崎県雲仙市教育委員会

土師器　陶磁器

平瓦　丸瓦　棟瓦

発行にあたって

雲仙市は、雲仙普賢岳の麓、豊かな大地と、光輝く海に囲まれた自然と文化のあふれるふるさとです。本報告書は、平成17年度に実施しました、雲仙市歴史資料館国見展示館改修事業に伴う小路遺跡発掘調査の記録です。

小路遺跡は、島原半島北端、雲仙市国見町神代小路に所在します。平成17年7月に選定された「重要伝統的建造物群保存地区」の一角に位置し、遺跡のすぐ脇には、保存地区の中心的建物である「国指定重要文化財　旧鍋島家住宅及び長屋門（通称鍋島邸：平成19年6月指定）」とその庭園が広がります。鍋島邸の玄関脇や保存地区内には、植樹された緋寒桜の緋色の花びらがゆれ、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

遺跡の概要を見ると、江戸時代には神代鍋島家家臣団の屋敷群、明治には尋常小学校や神代村役場、昭和に入り神代村立神代中学校が建てられました。昭和から平成にかけては、民間の繊維工場が建設され、地域の産業発展の場となるなど、多くの変遷をたどってきた場所です。民間企業の撤退後は旧国見町が跡地を買い取り、現在では緑地公園として整備され、市民の憩いの場となっています。遺跡内には雲仙市歴史資料館国見展示館があり、市内の発掘調査の成果を展示公開しています。今報告では、国見展示館整備時に行った、浄化槽埋設に伴う発掘調査の成果を報告します。本格的な発掘調査ではなく、開発に伴う事前確認調査として実施したものですが、貴重な成果が得られました。

この調査報告書が文化財の保護保存のために多くの方に活用され、埋蔵文化財の保護に対する関心と理解をいただく資料になれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県教育委員会学芸文化課の皆様からのご協力に衷心から感謝申し上げ、発行のことばといたします。

平成30年３月23日

雲仙市教育委員会

教育長　山　野　義　一

例　　言

1．本報告は平成17年度に実施した雲仙市歴史資料館国見展示館整備事業に伴う、長崎県雲仙市国見町神代に所在する小路遺跡の発掘調査の報告である。

2．調査は雲仙市教育委員会が担当した。調査は下記の期間実施した。

平成18年2月14日～平成18年3月2日

3．調査体制は次のとおりである。

雲仙市教育委員会（調査当時）

教　育　長　鈴山　勝利
教育次長　辻　政実
生涯学習課長　岩永　判二
文化財班班長　柴崎　孝光
主　査　江崎　亮太
主　査　辻田　直人
主　事　徳永　真幸
文化財調査員　竹中　哲朗
安樂　哲史
織田　健吾
文化財整理員　早稲田一美
柳原亜矢子
水谷　圭助
調査担当　辻田　直人

雲仙市教育委員会（現体制）

教　育　長　山野　義一
教育次長　坂本　英知
生涯学習課長　前田　孝章
文化財班班長　柴崎　孝光
参　事　補　辻田　直人
参　事　補　川島　敬彰
主　事　村子　晴奈
文化財調査員　松崎　光伸
今西　亮太
文化財整理員　早稲田一美
柳原亜矢子
三浦　幸菜

4．遺物の実測については、陶磁器・土師器は小野綾夏・松崎が行った。土師器の一部と瓦の実測・拓本は埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した

5．遺物の接合は早稲田・柳原が行った。遺構図版のトレースは早稲田が行った。遺物のトレースは早稲田が行った。また、図版の編集・作成は辻田・早稲田が行った。写真は現地調査を辻田が撮影した。掲載遺物写真は辻田・早稲田が行った。

6．本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市歴史資料館　国見展示館で保管している。

7．本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

8．現地調査および本書の刊行にあたり多くの方々からご助言いただいた、記して謝意を表します。宮武　正登（佐賀大学教授）、長崎県学芸文化課、長崎県考古学会、有限会社　前田工務店

9．本書の執筆・編集は辻田直人・松崎光伸が分担し、各章及び各節文末執筆者名を記した。

10．本書の編集は辻田による。

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（1/20,000）

第２図　調査区配置図（1/2,500）…… 2

第３図　TP-7遺構配置図及び土層1（1/40）‥ 5

第４図　出土遺物①（土師器1/3）…… 7

第５図　出土遺物②（陶磁器1/3　丸瓦1/4）‥ 9

第６図　出土遺物③（平瓦1/4）…… 10

第７図　出土遺物④（平瓦1/4）…… 11

第８図　出土遺物⑤（平瓦・棟瓦1/4）…… 14

表　目　次

遺物観察表①　…… 15

遺物観察表②　…… 16

目　　次

巻　頭　図　版

発行にあたって

例　　言

本　文　目　次

挿　図　目　次

表　　目　　次

図　版　目　次

第１章　調査の経緯 ……1p

第１節　発掘調査にいたる経緯

第２節　発掘調査の方法及び経過

第３節　遺跡の地理的・地形的・歴史的環境

第２章　発掘調査の状況 ……6p

第１節　検出された遺構

第２節　検出された遺物

第３章　まとめ ……17p

第１節　総括

図　版　目　次

中表紙図版（カラー）小路地区上空写真

図版１

遺跡上空写真（昭和36年国土地理院）

図版2

調査風景

SK-1検出状況

SK-1検出状況

調査区拡張

SK-3検出状況

SK-3検出状況

SK-3砂礫除去状況

柱穴検出状況

図版3

柱穴完掘状況

石列検出状況

土層堆積状況

調査後の掘削

調査後の掘削

掘削状況

出土した瓦

展示風景

図版4

出土遺物①（土師器1/3）

図版5

出土遺物②（陶磁器1/3　丸瓦1/4）

図版6

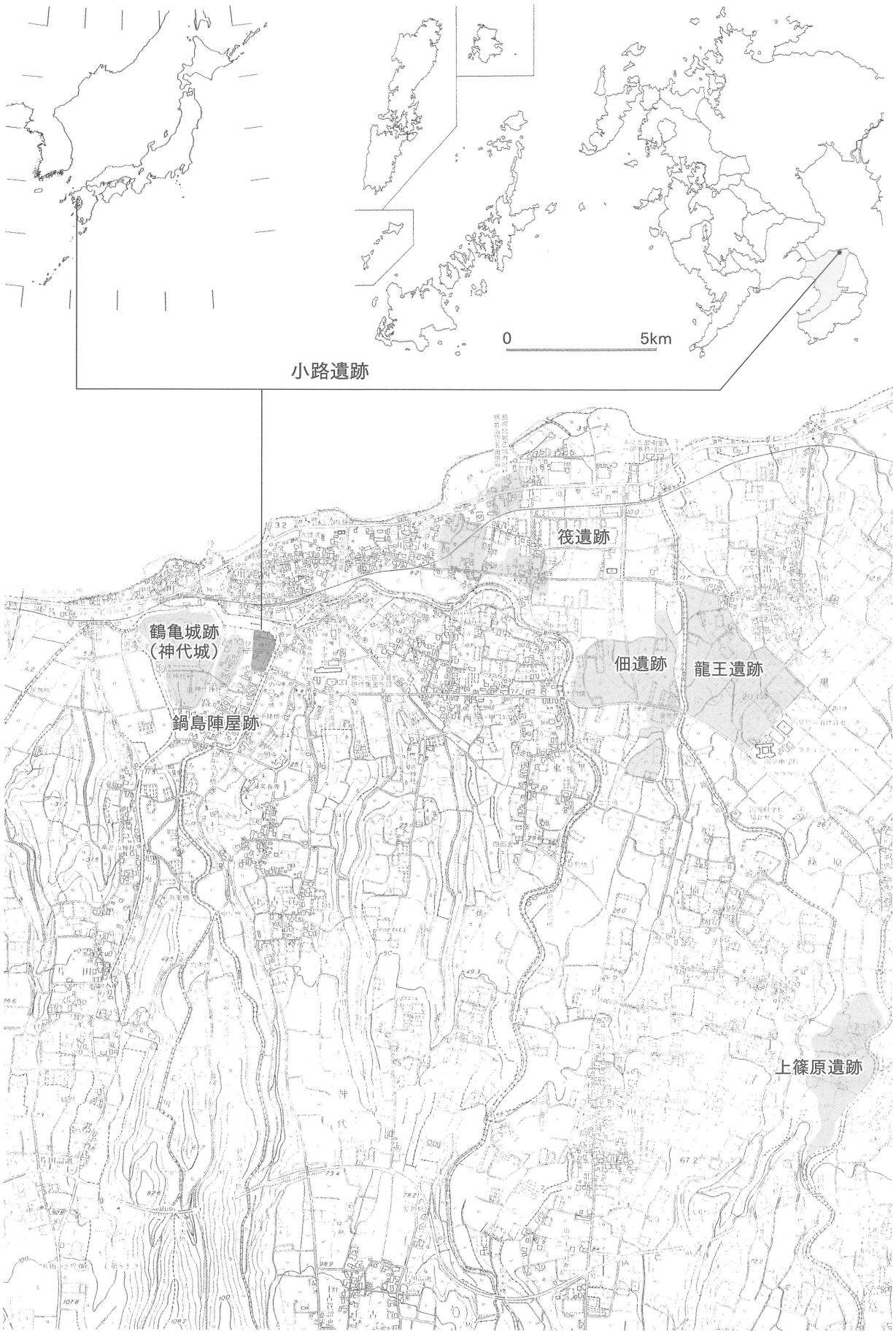
出土遺物③（平瓦1/4）

図版7

出土遺物④（平瓦1/4）

図版8

出土遺物⑤（平瓦・棟瓦1/4）



第１図　遺跡位置図（1/20,000）

第1章　調査の経緯

第1節　発掘調査にいたる経緯（第１図・第２図・図版１・図版２・図版３）

小路遺跡は、長崎県雲仙市国見町神代小路地区に所在する。「神代小路」地区は近世から続く武家町で、今も当時の様子をとどめている情緒のあるまちなみである。「神代小路」地区は、平成17年に「重要伝統的建造物群保存地区」として国からの選定を受けている。

今報告の調査は、小路遺跡内にある、雲仙市歴史資料館国見展示館の整備事業に伴い、浄化槽埋設工事が行われることなり、緊急調査を行った成果である。

小路遺跡は、平成13年に新規登録された遺跡である。民間の繊維工場跡地を旧国見町が取得し、今後、整備事業を行うにあたり、旧国見町教育委員会において事前の試掘調査を行った。調査は６箇所の試掘坑を設定し行い、５箇所の試掘坑から遺物や遺構が検出された。遺構の中には、江戸時代の絵図面や明治の字図に表記のある水路跡や、掘建柱建物跡などがあり、当時の遺跡の様子が良好に残存していることが予想された。出土遺物は主に18世紀中頃～19世紀の江戸時代の陶磁器類が検出された。

今報告の試掘坑は、平成13年度の調査に引き続き、ＴＰ-７として行った。調査地点は、神代小路の武家町の北端に位置し、江戸時代には家老職の屋敷群があった場所とされている。　（辻田）

第2節　発掘調査の方法及び経過（第１図・第２図・第３図・図版２・図版３）

調査は、埋設する浄化槽部分に３ｍ×６ｍの調査坑を設定し行った。調査坑内の掘削は、最上層の現地表面である表土を15cmほど重機により掘削し、それ以下は、包含層掘削、遺構面検出、遺構内部の掘り下げについてはすべて人力で行った。遺構については可能な限り平面図及び断面図を作成した。遺物は基本的に同一層及び各遺構一括で取り上げ、部分的には実測図の作成を行った。

－土層－

土層は５層に分けられる。第１層は現地表面で、非常に硬い地表面である。第２層は近世～近現代の遺物が混在する茶褐色砂礫混入層でやわらかい。第３層は上面が近世の遺構面である砂礫混じりの土層で、層厚約50cmを測る。黒灰色の土層だが、下側になるにつれ色調が黒く濃くなる。無遺物層である。第４層は灰色砂礫層で、拳大程の礫を混入する。第５層は同じく灰色の砂礫層であるが、第４層に見られるような拳大の礫はみられず、粒の細かい砂礫である。第５層掘削中に湧水により、さらなる掘り下げは断念した。試掘坑は神代川・みのつる川から30ｍほどの距離であり、満潮時には海水がしみでてくる。

調査終了後の浄化槽埋設時に重機による深堀に立ち会ったが、第５層以下も砂礫層が続き、地表面から2.5ｍほど下がったところで黒色の粘質土となった。いわゆる「がた」と考えられる。　（辻田）

【参考文献】

国見町教育委員会　2003『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告　長崎県国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)

辻田直人・村子晴奈　2010『鶴亀城(神代城)跡』雲仙市文化財調査報告書　第9集　長崎県雲仙市教育委員会

辻田直人・竹田将仁　2012『鍋島陣屋跡』雲仙市文化財調査報告書　第10集　長崎県雲仙市教育委員会

第２図　調査配置図（1/2,500）

第3節　遺跡の地理的・地形的・歴史的環境（第1図・第2図）

小路遺跡は、島原半島の最北端、雲仙市国見町「神代小路（こうじろくうじ）」地区に位置する。中世の城郭跡である鶴亀城(神代城)跡の東側に位置し、遺跡の北側には有明海と神代川が、東にはみのつる川が流れる。「神代小路」地区は、佐賀鍋島藩を本藩とする神代鍋島領主の居住地である鍋島邸と、その家臣を集めて形成された武家町である。東西150m、南北350mの長方形を呈するまちなみで、鶴亀城(神代城)跡に面する以外の三方は、みのつる川や神代川に囲まれ、南北に通る本小路と上小路がメインストリートとなり、その他に横町小路・安光小路・今小路で形成されている。武家町「神代小路」地区は、平成17年に「重要伝統的建造物群保存地区」として国からの選定を受けており、小路遺跡はその「神代小路」地区内、もっとも北側に所在する。

「神代小路」地区西側にそびえる鶴亀城(神代城)跡は、中世の在地豪族「神代氏」（神代貴益）の居城として歴史の舞台に登場する。有明海に面した独立台地上に位置し、周囲の平地部分との比高差は８m～15mを測る。島原半島は雲仙普賢岳を主峰とし、円錐状を呈する。その裾野部分には、古期雲仙火山の活動により舌状に延びた丘陵が何本も存在し、あたかも手のひらの指を開いたように海岸付近まで延びる。鶴亀城はその丘陵の先端部がみのつる川によって寸断され、独立した島状の台地となったものである。周囲との比高差もあいまって難攻不落の海城と伝えられている。

神代氏は、戦国時代末期の1577年、龍造寺隆信が島原半島に進出するとともにその配下に加わる。1584年の沖田畷の戦いで島津・有馬と戦うが、龍造寺の敗北とともに、神代氏は滅亡することとなる。1587年には豊臣秀吉の九州平定により、神代・伊古(現雲仙市瑞穂町)・古部(現雲仙市瑞穂町)が佐賀領に編入されることとなり、初めて佐賀領としての神代小路が誕生する。当時の佐賀藩は、龍造寺・鍋島の二頭両立体制であったが、1607年に龍造寺政家と龍造寺隆信の孫である藤太郎高房が死去したことにより、鍋島直茂の子である勝茂を当主とする鍋島佐賀藩が成立する。その翌年、神代小路は勝茂の父親の兄にあたる鍋島信房の所領となり、神代鍋島領が誕生することになる。初代信房から三代までは神代小路に居を構えず、1663年４代嵩就（たかなり）から神代小路に入り、17世紀後半には武家町が造成されたと伝えられている。４代嵩就は、治世に優れ神代小路の武家町を整備し領内の農・林業の発展に貢献し多くの領民に親しまれたという。

神代鍋島領は、明治２年の版籍奉還まで続いた。それ以降は、宅地開発や神代小学校・中学校、道路建設やみのつる川の改修等が行われた。特に横町小路付近は、まちなみの変化が著しく、明治初期には神代小学校(尋常小学校)や神代村役場が、昭和23年には神代村中学校が建てられ、神代村の中でも中心的な役割を担っていた地域であったようである。また、昭和42年には、神代村中学校のグラウンド跡に繊維工場などが建てられ、平成７年まで操業を続けたが、その後撤退した。その土地を平成12年に国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)が取得し、現在は、神代村中学校の校舎の改修を行い、雲仙市歴史資料館国見展示館として活用している。

遺跡の西側に位置する鶴亀城(神代城)跡は東西に走る大きな空堀で分断され、北側が二の丸、南側の1段標高が高い方が本丸とされている。地元小路地区の故帆足清勝氏は、詳細な城跡の縄張り図を作成し、構築年代や城名の由来、その他、鶴亀城(神代城)跡に関わる周囲の地形や歴史、関連の城郭跡などの研究(帆足清勝資料)を行っている。また、近年、鶴亀城(神代城)跡を踏査した木島孝之氏は本丸部分の縄張り図を作成し、巨大な枡形虎口や周囲の土塁の存在を明らかにしている。また、木島氏は報告(木島2003)の中で、鶴亀城(神代城)跡(木島氏は神代城と呼ぶ)の枡形虎口や土塁は、神代鍋島氏による大規模改修と考えられ、織豊系縄張り技術により在地系城郭をベースに改修された“織豊系もどきの城郭”と位置づけている。また、長崎県教育委員会の調査では、二の丸についても土塁や

船着場等が残存しており、神代鍋島家による城の改修が全体的に及んでいることが判明している。

小路遺跡が存在する「神代小路」地区は、前述したが第４代鍋島嵩就の時代に築かれたとされ、また、鍋島陣屋の年代についても、最も古い長屋門が元禄時代と想定されてきた。しかしながら、平成24年度に報告した鍋島陣屋跡(2012辻田・竹田)や保存修理工事に伴う解体作業や、鍋島家の日記などにより、長屋門は幕末期文久2年(1862)に建てられ、御北と呼ばれる茅葺屋根の建物が万延元年(1860)に建てられたものと判明している。また、平成22年度に報告した鶴亀城(神代城)跡(2010辻田・村子)においては、18世紀以降の建物基礎遺構や土坑などが武家町「神代小路」地区の中央で検出されている。同様に、長屋門東側で検出された水路跡と廃棄土坑から、18世紀後半以降の陶磁器が大量に検出され、平成24年度の鍋島陣屋跡(2012辻田・竹田)の調査でも、18世紀代の大規模な造成工事の痕跡が検出された。鍋島陣屋跡を含む「神代小路」地区の発掘調査では、河川堆積層から弥生時代～古墳時代の遺物が出土することから、鍋島陣屋跡付近は、少なくとも弥生時代～古墳時代には河川(みのつる川)跡であったことや、中世神代氏時代の堀跡は、河川(みのつる川)跡を利用したものであったことが判明した。また、武家町「神代小路」地区は、神代鍋島家による埋立造成によって作られたとされてきたが、地区内の大部分はみのつる川の河川堆積による中州状の土地で、神代鍋島家による埋立造成は、鶴亀城(神代城)跡の堀部分や、武家町周囲の護岸部分と想定されるなど、鍋島陣屋跡や武家町神代小路の成り立ちについて、多くの事柄が判明している。今回の調査の成果でも、18世紀後半以降から昭和初期にかけての遺構や陶磁器類などが多く出土しており、嵩就の治世と考えられる時代の遺物や遺構は確認されていない。これらのことから、第４代嵩就(1701年没)のころの「神代小路」地区のまちなみや鍋島陣屋の様子は、今と大きく異なっていたと予想される。　　(辻田)

(村子2014『小路遺跡』第１章第３節に加筆)

【参考文献】

木島孝之　2003「第２章　神代城と神代「小路」」2003国見町教育委員会『神代小路』国見町伝統的建造物群保存対策調査報告　長崎県国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)

国見町　1984『国見町郷土史』国見町

国見町教育委員会　2003『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告　長崎県国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)

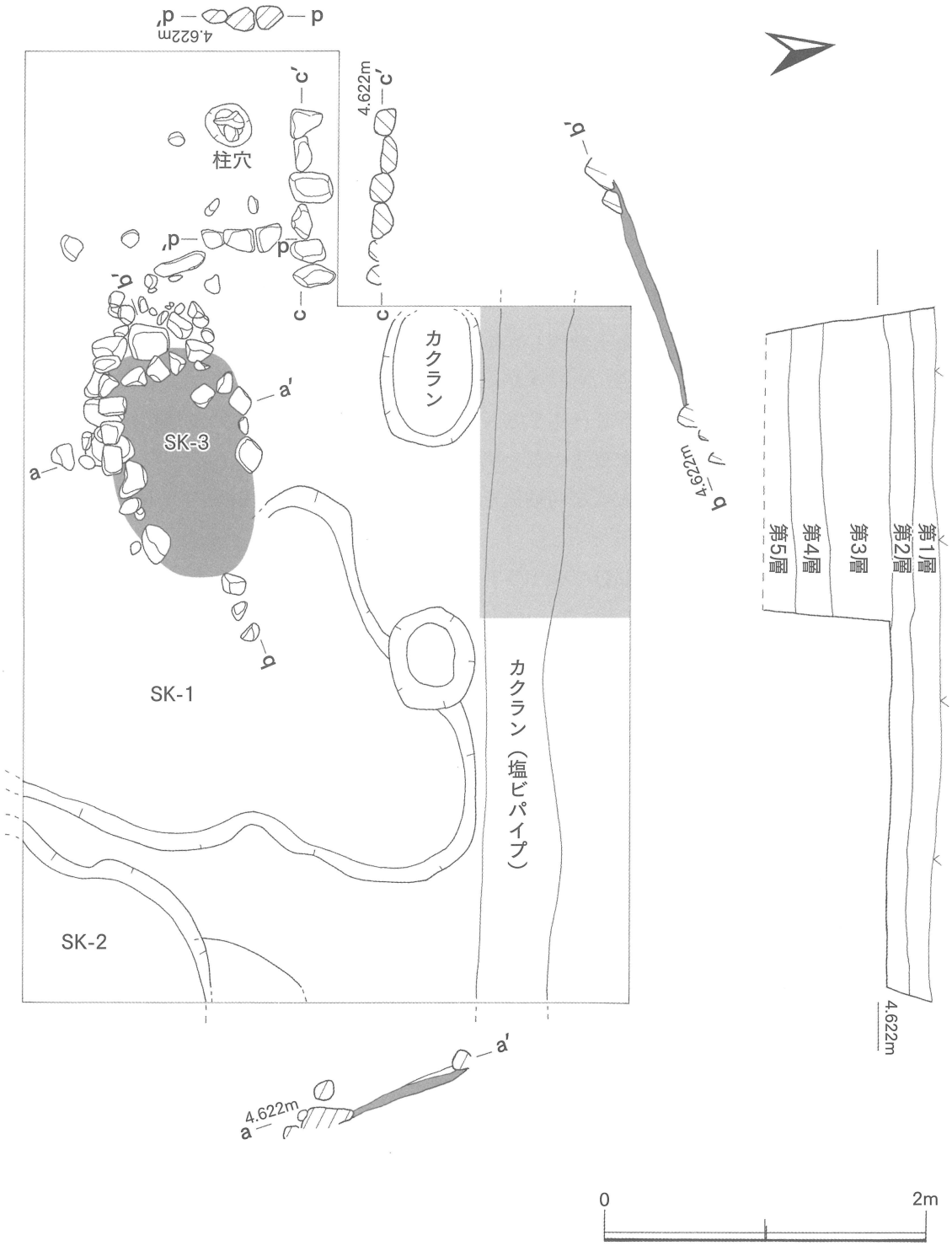
神代を史ろう会　2009『神代鍋島家年譜』

辻田直人・村子晴奈　2010『鶴亀城(神代城)跡』雲仙市文化財調査報告書　第９集　長崎県雲仙市教育委員会

辻田直人・竹田将仁　2012『鍋島陣屋跡』雲仙市文化財調査報告書　第10集　長崎県雲仙市教育委員会

村子晴奈　2014『小路遺跡』雲仙市文化財調査報告書　第13集　長崎県雲仙市教育委員会

宮本雅明　2003「第３章　神代小路の空間と景観」2003国見町教育委員会『神代小路』国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告　長崎県国見町教育委員会(現雲仙市教育委員会)



第３図　TP-7遺構配置図及び土層（1/40）

第２章　発掘調査の状況

第1節　検出された遺構（第３図）

第３層上面で３基の土坑（ＳＫ）と柱穴、石列が検出されている。

－ＳＫ-１－

試掘坑の南半分に深さ20cmほどで浅く広がるもので、内部からは多くの陶磁器類や瓦、礫が検出された。出土品には欠損品が多くほとんどが廃棄されたものと考えられ、ＳＫ－１は廃棄土坑と考えられる。

－ＳＫ－２－

ＳＫ－１の東側に広がる浅い土坑で、検出状況や出土遺物の状況もＳＫ－１と同様で、同じく廃棄土坑と考えられる。

－ＳＫ－３－

ＳＫ－１を掘り込むように検出されている。土坑周囲には拳大から人頭大の礫が並べられ、その範囲は、長軸２ｍ、短軸１ｍの楕円形で、内部からは陶磁器や瓦が出土する。並べられていた礫は、近隣で採取可能な角閃石安山岩で、神代川やみのつる川の川原石と考えられる。土坑内部最下層には川原で採取してきたと考えられる「細かな砂礫」が堆積しており、人為的に入れ込まれたものであろう。また、土坑周囲に並べられた礫の下側にも砂礫が続いており、浅い土坑を掘削後、砂礫を敷き、その後に礫を並べたものと考えられる。ＳＫ－１やＳＫ－２の廃棄土坑とは明らかに違い、その西側に続く石列と一連のものと考えられ、屋敷裏手の庭の構築物と考えられる。

３基の土坑の出土遺物はそれほど大きな時期差を認められず、比較的近い時期のものと考えられる。

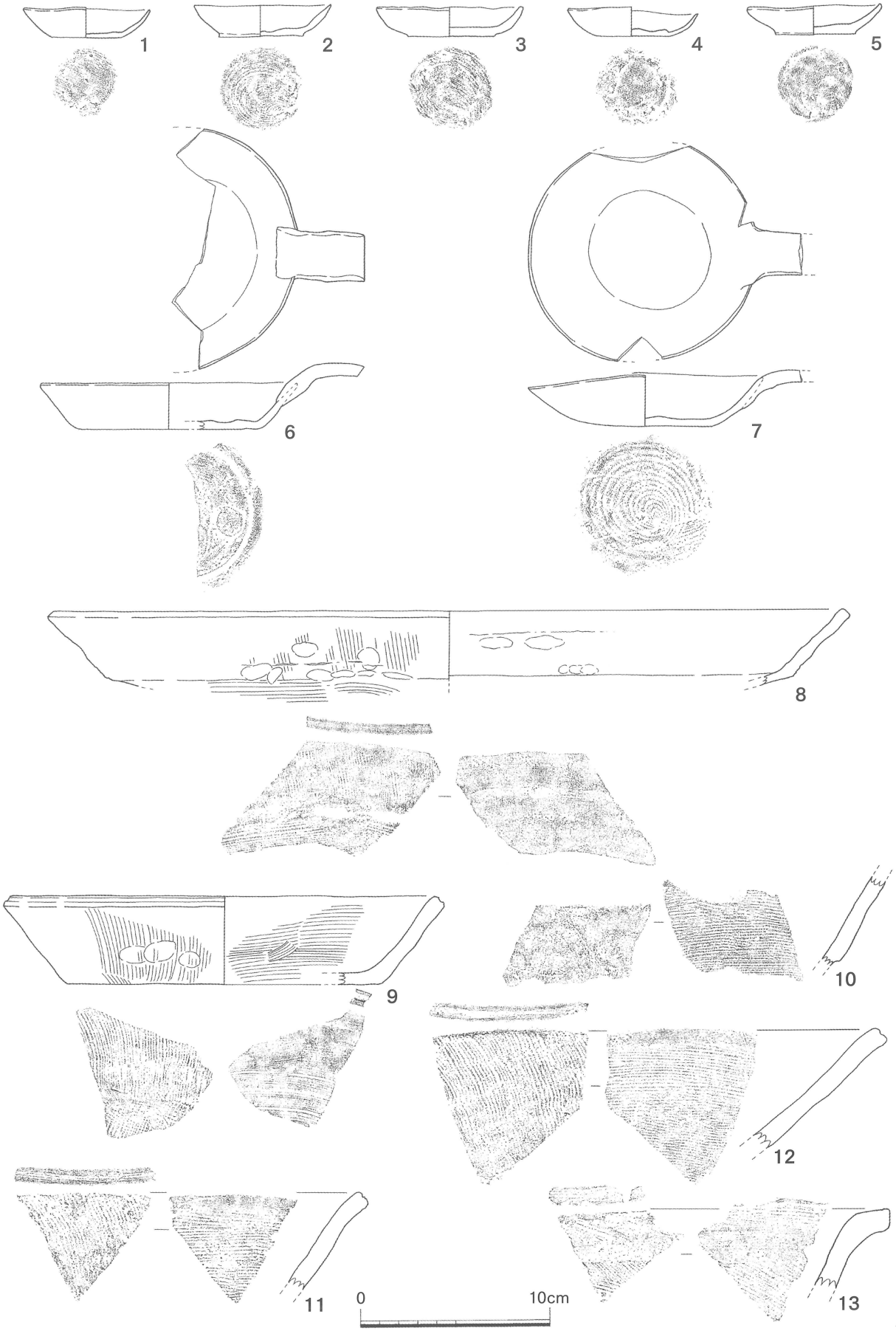
－柱穴－

試掘坑西側に続く石列に囲まれた部分で検出された。検出時は覆土内部に赤色の被熱した土が入れ込まれていた。径30cmの円形で、深さは70cmほど。柱穴内部には人頭大の礫が数個入れ込まれており、最上部の礫は被熱していた。垂直に掘り込まれたしっかりとしたもので、周囲の石列と一帯となる施設の一部であろうか。検出時の状況から、柱穴は人為的に礫などを入れて埋め戻し、その後、上部で火を焚いたものと考えられる。柱穴内部の礫は、近隣で採取可能な角閃石安山岩である。

－石列－

石列は、近隣で採取可能な角閃石安山岩で構成されており、神代川やみのつる川の川原石と考えられる３個と６個の礫がそれぞれ直行するように直線的に並べられている。柱穴が検出された方向の面がそろえられており、西側と南側面を意識して並べられたものとなっている。いずれも１段分しか検出されておらず高さのある石垣になるかどうか不明であるが、仮に石垣であったとしても、その構造から数段程度の低い石垣であったと考えられる。

検出された遺構のうち、ＳＫ－１、ＳＫ－２は不要物の投棄を行った廃棄土坑で、ＳＫ－３、柱穴、石列は、屋敷裏庭の構造物と考えられる。ＳＫ－３については、細かな砂礫などが丁寧にしかれている状況を見ると、屋敷裏庭に作られた庭園の一部の可能性もある。　（辻田）



第４図　出土遺物①（土師器 1/3）

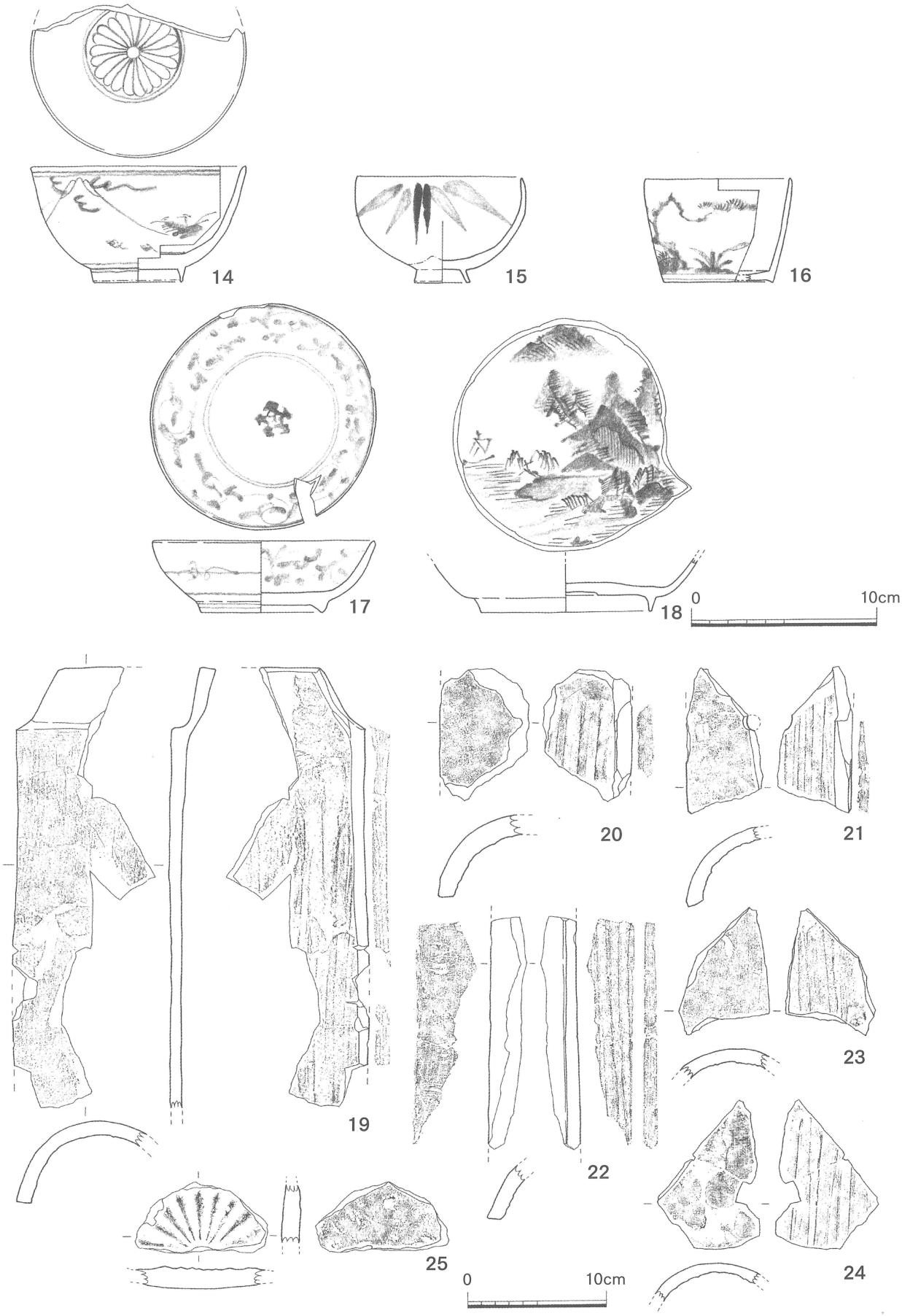
第２節　検出された遺物

土師質土器

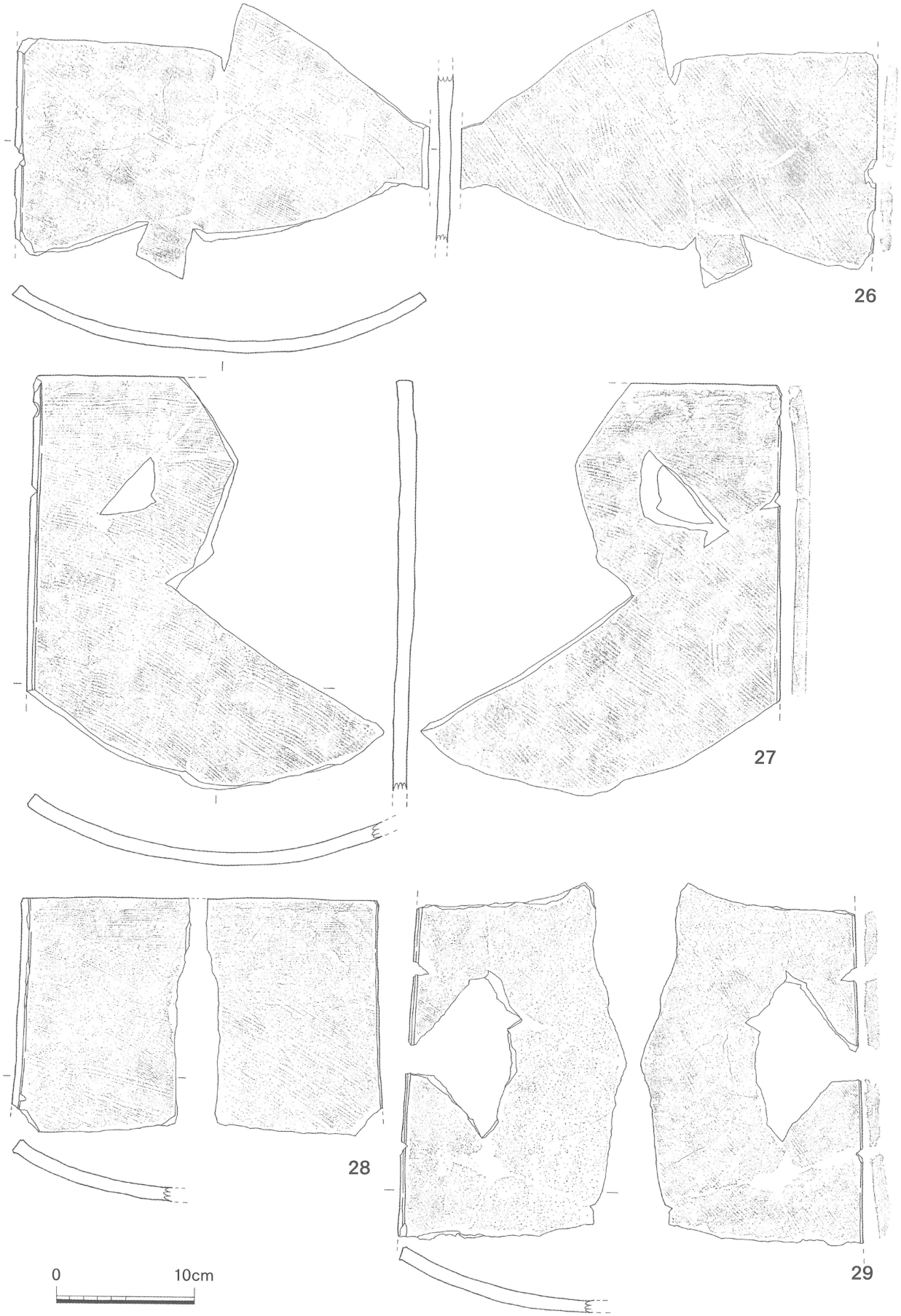
1は、灯明皿である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けてゆるやかに上がり、やや内湾する。口縁部に黒いタール状のものの付着がみられる。内外面ともに回転を利用した横位のナデ調整がされている。底面は回転糸切りで、丁寧に仕上げている。**2**は、灯明皿である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けてやや内湾する。口縁部に黒いタール状のものの付着がみられる。内外面ともに回転を利用した横位のナデ調整がされている。底面は回転糸切りで、切り離したまま整えていない。**3**は、灯明皿である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けてゆるやかに上がり、やや内湾する。口縁部に黒いタール状のものの付着がみられる。内外面ともに回転を利用した横位のハケ後ナデ調整がされている。底面は回転糸切りである。**4**は、灯明皿である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けてやや内湾する。口縁部に黒いタール状のものの付着がみられる。内外面ともに回転を利用した横位のハケ後ナデ調整がされている。底面は回転糸切りである。**5**は、灯明皿である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けてゆるやかに上がり、口縁端部は内湾する。内外面ともに回転を利用した横位のハケ後ナデ調整がされている。底面は回転糸切りである。**6**は、焙烙である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けて斜めに立ち上がる。坏に柄の部分を取り付けている。柄は短く、ナデと指頭圧痕が明瞭に残る。坏の部分は内外面ともに回転を利用した横位のハケ後ナデ調整がされている。底面は回転糸切りである。**7**は、焙烙である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けて斜めに立ち上がる。坏に柄の部分を取り付けている。柄の部分はナデと指頭圧痕が明瞭に残る。坏の部分は内外面ともに回転を利用した横位のハケ後ナデ調整がされている。底面は回転糸切りである。底面は黒く、下から火を受けている。**8**は、鍋である。底部は欠損し、胴部から口縁部にかけて残存する。胴部は斜めに立ち上がり、口縁部との接合部分で屈曲し、口縁部はやや外反する。外面は胴部から口縁部にかけては斜位のハケ調整で、胴部から底部にかけては横位のハケ調整がされている。内面はナデ調整がされ、内外面ともに屈曲部付近に指頭圧痕が残る。**9**は、坏である。底部は平坦で、底部から口縁部に向けて斜めに立ち上がる。外面は斜位のハケ調整で、指頭圧痕が残る。内面は横位のハケ調整がされている。口唇部に二条の沈線がみられる。**10**は、土師質土器の胴部である。外面はケズリ後ナデ調整がされ、指頭圧痕が残る。内面は横位のハケ調整で、指頭圧痕が残る。**11**は、土師質土器の口縁部である。胴部から口縁部に向けて斜めに立ち上がり、口縁端部はやや外反する。外面は斜位のハケ後ナデ調整がされている。内面は横位のハケ後ナデ調整がされている。**12**は、土師質土器の口縁部である。胴部から口縁部に向けて斜めに立ち上がる。外面は斜位のハケ調整がされ、指頭圧痕が多く残る。内面は横位のハケ後ナデ調整がされている。口唇部に一条の沈線がみられる。９と類似しているので、坏の口縁部か。**13**は、土師質土器の口縁部である。胴部から口縁部に向けて斜めに立ち上がり、口縁端部は外反する。外面はハケとケズリ後ナデ調整がされている。内面は口縁部で横位のハケ調整、胴部は斜位のハケ後ナデ調整がされている。

陶磁器

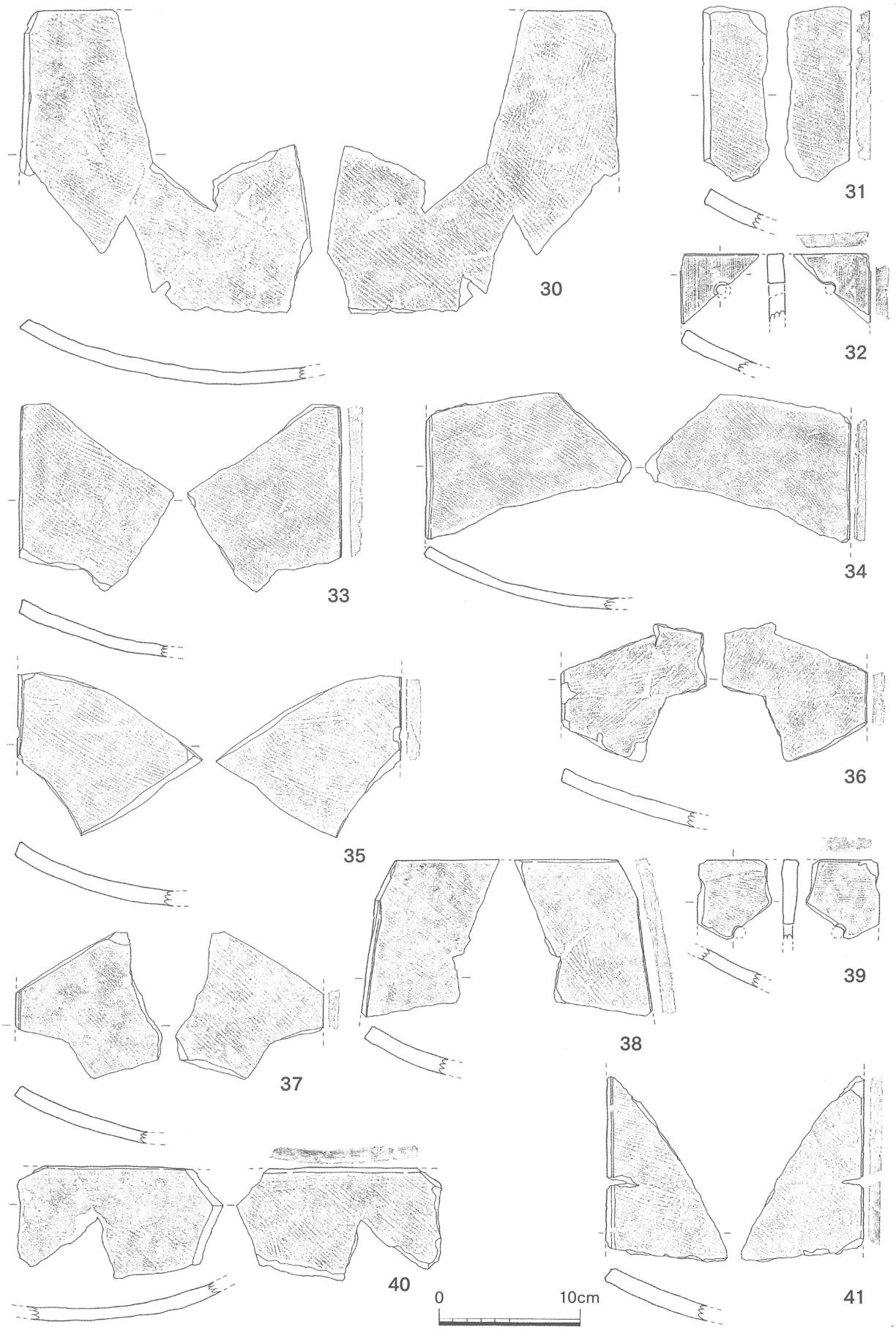
14は、染付磁器の丸形碗である。高台脇から口縁部に向けてゆるやかに立ち上がる。内面の見込みには二重圏線がめぐり菊花文が描かれている。外面には山、雲、鳥文が描かれている。肥前磁器で、18世紀中頃～18世紀後半のものか。**15**は、陶器の色絵碗である。高台脇から口縁部に向けてゆるやかに内湾しながら立ち上がる。底部は無釉である。外面には葉文が描かれている。関西系か。**16**は、染付磁器の蕎麦猪口である。高台から口縁部に向けてやや垂直に立ち上がる。外面には高台内に一重圏線、胴部に松、草、岩文が描かれている。肥前磁器で、18世紀後半～19世紀初頭のものか。**17**は、



第５図　出土遺物②（陶磁器 1/3　丸瓦 1/4）



第６図　出土遺物③（平瓦 1/4）



第７図　出土遺物④（平瓦 1/4）

染付磁器の皿である。高台脇から口縁部に向けてゆるやかに立ち上がる。内面の見込みには二重圏線がめぐり中央部にコンニャク印判五弁花文、胴部には唐草文が描かれている。外面には高台内に二重圏線、胴部に２つの一重圏線と草文が描かれている。肥前磁器で、18世紀中頃～19世紀初頭のものか。**18**は、染付磁器の蛇の目凹形高台輪花皿である。高台脇から口縁部に向けてやや急激に立ち上がる。内面の見込みには海浜風景文が描かれている。肥前磁器で、19世紀初頭～中頃のものか。

丸瓦

19は、凸面ではヘラ状工具による縦位のケズリ後ナデ調整がされている。胴部、頭部、尻部は横位のハケ後ナデ調整、長側辺端部は一定間隔のハケ調整、玉縁部はナデ調整がされている。凹面は長軸方向にヘラ状工具によるオサエ痕が残り、玉縁接合部は横位のハケ後ナデ調整がされている。**20**は、凸面では丁寧なナデ調整で、長側辺端部はケズリ後ナデ調整がされている。凹面の頭部と長側辺は面取りがされ、板状工具（竹管状か）によるオサエ痕が残る。凸凹両面の表面に微細な雲母粉の付着がみられる。キラコと考えられる。**21**は、凸面では短軸方向にハケ後ナデ調整で、長側辺端部は面取りがされている。凹面は長軸方向に板状工具によるオサエ痕が残り、長側辺はヘラ状工具による面取りがされている。釘穴があり、凸凹両面の表面及び胎土中にわずかなキラコの付着がみられる。**22**は、凸面では長軸方向にハケ後ナデ調整で、部分的に長側辺端部近くに短軸方向にハケ調整がされている。瓦を重ねた痕がある。凹面の長側辺はハケ調整で、長軸方向に板状工具によるオサエ痕が顕著に残り、長側辺端部は面取りがされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**23**は、凸面では長軸方向にヘラ状工具によるケズリ後ナデ調整がされている。凹面は長軸方向に板状工具によるオサエ痕が残る。凸凹両面の表面にキラコがみられる。**24**は、凸面では長軸方向にヘラ状工具によるケズリ後ナデ調整がされ、一部に布目痕が残る。凹面は長軸方向に丸みのある工具によるオサエ痕が残る。土師質である。**25**は、軒丸瓦である。瓦当に花文様が見られる。文様は、復元で中央に円形の花芯と18～20枚の花弁が見られ、菊花文と考えられる。凹面はハケ後ナデ調整がされ、指頭圧痕が残る。凸凹両面に微細なキラコの付着がみられる。

平瓦

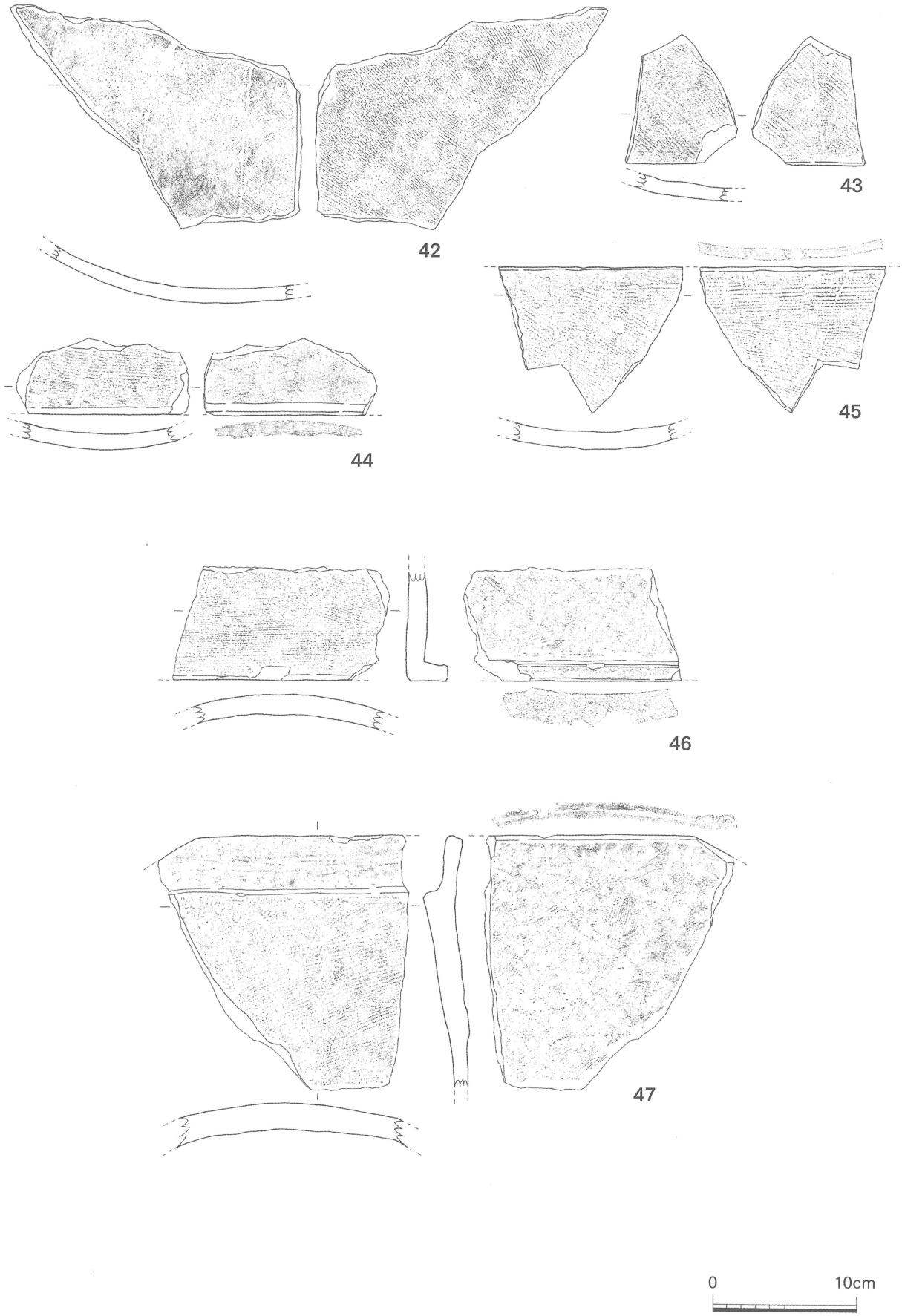
26は、凸面では斜位のハケ調整で、中央付近に指頭圧痕が顕著に残る。凹面は斜位のハケ調整で、一部ナデ調整がされ、指頭圧痕が残る。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**27**は、凸面では斜位のハケ調整で、頭部から５cm程の幅では、横位のハケ後ナデ調整がされている。頭部、胴部中央付近に指頭圧痕が残り、長側辺小口は幅２mm程の面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整で、頭部から幅5cm程は横位のハケ調整がされている。頭部、胴部中央付近に指頭圧痕が残る。頭部はヘラ状工具による面取りで、長側辺小口は幅2mm程の面取りがされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**28**は、凸凹面とも斜位のハケ調整で、頭部付近は横位のハケ調整がされ、指頭圧痕が残る。全体的に丁寧な作りである。キラコの付着がみられる。**29**は、凸面では斜位のハケ調整で、わずかに指頭圧痕が残る。凹面は斜位のハケ後ナデ調整がされ、指頭圧痕が残る。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**30**は、凸面では斜位のハケ調整で、所々に反対方向から短い斜位のハケ調整がされている。頭部は横位のナデ調整がされている。凹面は斜位のハケ調整で、頭部は横位のナデ調整がされ、凹面全体に指頭圧痕が残る。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**31**は、凸面では斜位のハケ調整で、長側辺小口は細い面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整がされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。長側辺小口は直角切りである。**32**は、凸面では横位のハケ調整で、頭端部は幅１cm程の浅い面取り、側辺小口端部は細い面取りがされている。凹面は横位のハケ調整で、頭端部は面取りがされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。釘穴がある。**33**は、凸面では

斜位のハケ調整で、指頭圧痕が残り、長側辺小口端部は面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整で、指頭圧痕が残る。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**34**は、凸面では斜位のハケ調整で、指頭圧痕が残り、長側辺小口端部は面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整で、長側辺小口端部は面取りがされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**35**は、凸面では斜位のハケ後丁寧なナデ調整で、指頭圧痕が残り、側辺端部は面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整で、指頭圧痕が残り、長側端部は面取りがされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**36**は、凸凹面とも斜位のハケ調整で、端部は横位のナデ調整がされている。キラコの付着がみられる。**37**は、凸面では斜位のハケ調整で、指頭圧痕が残る。凹面は斜位のハケ調整で、指頭圧痕が残り、長側辺端部は面取りがされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**38**は、凸面では斜位のハケ調整で、頭部付近は横位のハケ後ナデ調整、長側辺小口はケズリ後ナデ調整、頭部小口はケズリ後ナデ調整がされている。長側辺小口は幅２mm程の面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整で、長側辺小口は幅１mm程の面取りがされている。凸凹両面の頭部、長側辺に指頭圧痕が残り、キラコの付着がみられる。**39**は、凸面では横位のハケ調整で、尻部から３cm程残して斜位のハケ調整がされ、指頭圧痕が残る。凹面は斜位のハケ調整で、端部は面取りがされている。凸面から凹面に穿孔した直径1.0cm程の釘穴がある。**40**は、凸面では頭端部が横位のナデ調整で、胴部は斜位のハケ調整がされ、指頭圧痕が残る。凹面は頭端部が横位のハケ調整で、胴部は斜位のハケ調整がされ、指頭圧痕が残る。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**41**は、凸凹面とも斜位のハケ調整で、側辺小口端部は面取りがされている。キラコの付着がみられる。**42**は、凸凹面とも斜位のハケ調整で、まんべんなく指頭圧痕が残る。キラコの付着がみられる。**43**は、凸凹面とも斜位のハケ調整で、端部は横位のナデ調整がされ、指頭圧痕が残る。キラコの付着がみられる。**44**は、凸面では頭端部が面取り後ナデ調整で、胴部は斜位のハケ後ナデ調整がされている。凹面は斜位のハケ後横位のハケ調整がされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。他の鍋島瓦と比べ、厚みが有り凸面調整痕がきれいにナデ消している。**45**は、凸面では頭部小口が縦位のハケ調整で、胴部上位から頭部は横位のハケ調整、胴部上位から尻部は斜位のハケ調整がされている。頭端部は面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整で、頭端部は面取りがされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。

棟瓦

46は、凸面では横位のハケ後斜位のハケ調整がされている。端部から４cm程の幅は、斜位のハケ調整をされていない。L字の接合部分は面取りがされている。凹面は斜位のハケ調整がされている。L字の接合部分はオサエ後横位のハケ調整がされている。凸凹両面にキラコの付着がみられる。**47**は、凸面では斜位のハケ後ナデ調整で、玉縁部は横位のナデ調整がされ、指頭圧痕が残る。凹面は斜位のハケ後ナデ調整で、玉縁部は横位のナデ調整がされ、指頭圧痕が明瞭に残る。

（松崎）



第８図　出土遺物⑤（平瓦・棟瓦 1/4）

遺物観察表①

図	番号	遺物名称	法量(cm)		技法的特徴		胎土/色調	文様	備考
4	1	灯明皿	口径 器高 底径	6.7 1.6 3.6	外面 内面 底部	横位のナデ 横位のナデ 回転糸切り	石英、雲母、白色粒子 外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色		口縁部に黒色ター ル状のものが付着、 丁寧な仕上げ
	2	灯明皿	口径 器高 底径	7.4 1.7 4.4	外面 内面 底部	横位のナデ 横位のナデ 回転糸切り	石英、金雲母、白色粒子、赤色粒子 外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色		口縁部に黒色ター ル状のものが付着
	3	灯明皿	口径 器高 底径	7.8 1.6 4.5	外面 内面 底部	横位のハケ後ナデ 横位のハケ後ナデ 回転糸切り	金雲母、白色粒子、赤色粒子 外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色		口縁部に黒色ター ル状のものが付着
	4	灯明皿	口径 器高 底径	6.9 1.5 3.8	外面 内面 底部	横位のハケ後ナデ 横位のハケ後ナデ 回転糸切り	雲母、白色粒子 外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色		口縁部に黒色ター ル状のものが付着
	5	灯明皿	口径 器高 底径	6.3 1.6 4.4	外面 内面 底部	横位のハケ後ナデ 横位のハケ後ナデ 回転糸切り	金雲母、雲母 外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色		口縁部に黒色のも のが付着
	6	焙烙	口径 器高 底径	13.6 3.5 9.4	外面 内面 柄 底部	横位のハケ後ナデ 横位のハケ後ナデ ナデ 回転糸切り	雲母、白色粒子 外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色		土師質土器
	7	焙烙	口径 器高 底径	3.1 7.0	外面 内面 柄 底部	横位のハケ後ナデ 横位のハケ後ナデ ナデ 回転糸切り	雲母、白色粒子 外面：黒色 内面：にぶい黄橙色		土師質土器
	8	鍋	口径 器高 底径	3.9	外面 内面 底部	斜位のハケ、横位のハケ ナデ	長石、雲母		土師質土器
	9	坏	口径 器高 底径	23.4 4.7 16.6	外面 内面 底部	斜位のハケ後ナデ 横位のハケ			口唇部に二条の沈 線、土師質土器
	10	土師質土器	口径 器高 底径		外面 内面 底部	ケズリ後ナデ 横位のハケ後ナデ	石英、長石、雲母		胴部
	11	土師質土器	口径 器高 底径	5.3	外面 内面 底部	斜位のハケ後ナデ 横位のハケ後ナデ	長石、雲母		口縁部
	12	土師質土器	口径 器高 底径	6.4	外面 内面 底部	斜位のハケ 横位のハケ後ナデ	石英、長石、雲母		口縁部、口唇部に 一条の沈線
	13	土師質土器	口径 器高 底径	6.4	外面 内面 底部	ケズリ、ハケ後ナデ ハケ後ナデ	角閃石、長石、雲母		口縁部
5	14	染付丸形碗	口径 器高 底径	11.6 6.3 4.7	外面 内面 底部			見込み：二重圏線、菊花文 外面：山、雲、鳥文 高台：二重圏線	肥前磁器
	15	色絵碗	口径 器高 底径	8.9 5.8 3.0	外面 内面 底部			外面：葉文	陶器、底部は無釉、 関西系か
	16	染付蕎麦猪口	口径 器高 底径	8.0 5.7 5.0	外面 内面 底部			外面：松、草、岩文 高台：一重圏線	肥前磁器
	17	染付皿	口径 器高 底径	12.1 3.9 6.6	外面 内面 底部			見込み：2重圏線、コンニャク 印判五弁花文 内面：唐草文 外面：一重圏線×２、草文 高台：二重圏線	肥前磁器
	18	染付皿	口径 器高 底径	9.2	外面 内面 底部			見込み：海浜風景文	蛇の目凹形高台、 輪花、肥前磁器
	19	丸瓦	残存長 残存幅 最大厚	32.1 10.5 1.1	凸面 凹面	ケズリ、ハケ後ナデ	凸面：黄灰色 凹面：灰色		
	20	丸瓦	残存長 残存幅 最大厚	9.5 6.4 1.5	凸面 凹面	丁寧なナデ 面取り	凸面：褐灰色 凹面：黄灰色		凸凹両面にキラコ 付着
	21	丸瓦	残存長 残存幅 最大厚	10.5 5.5 1.2	凸面 凹面	ハケ後ナデ、面取り 面取り	凸面：灰白色 凹面：灰白色		釘穴有、凸凹両面 にキラコ付着
	22	丸瓦	残存長 残存幅 最大厚	10.5 5.5 1.2	凸面 凹面	ハケ後ナデ 面取り	凸面：黄灰色 凹面：黄灰色		凸面に瓦を重ねた 痕有、凸凹両面に キラコ付着
	23	丸瓦	残存長 残存幅 最大厚	9.2 6.5 0.9	凸面 凹面	ヘラケズリ後ナデ	凸面：黄灰色 凹面：灰色		凸凹両面にキラコ 付着
	24	丸瓦	残存長 残存幅 最大厚	11.0 7.5 0.8	凸面 凹面	ヘラケズリ後ナデ	凸面：黄灰色 凹面：暗灰色		凸面に布目痕有、 土師質

遺物観察表②

図	番号	遺物名称	法量(cm)		技法的特徴		胎土/色調	文様	備考
6	25	軒丸瓦 (瓦当部)	残存長 残存幅 最大厚	5.1 9.5 1.4	凸面 凹面	 ハケ後ナデ	凸面：灰黄色 凹面：浅気色	(瓦当) 菊花文	凸凹両面にキラコ付着
	26	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	20.3 30.0 1.1	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ、一部ナデ	凸面：黄灰色 凹面：灰色		小口は直角切り、凸凹両面にキラコ付着
	27	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	30.1 25.8 1.2	凸面 凹面	斜位のハケ、面取り 斜位のハケ、面取り	凸面：灰色 凹面：灰色		凸凹両面にキラコ付着
	28	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	17.1 12.8 1.4	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ	凸面：オリーブ黒色 凹面：黄灰色		丁寧な作り、凸凹両面にキラコ付着
	29	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	26.2 16.3 1.1	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ後ナデ	凸面：灰色 凹面：灰黄色		凸凹両面にキラコ付着
7	30	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	22.0 20.9 1.2	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ	凸面：灰白色 凹面：灰白色		凸凹両面にキラコ付着
	31	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	12.8 4.8 1.2	凸面 凹面	斜位のハケ、面取り 斜位のハケ	凸面：灰色 凹面：黒褐色		長側辺小口は直角切り、凸凹両面にキラコ付着
	32	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	5.6 5.0 1.1	凸面 凹面	横位のハケ、面取り 横位のハケ、面取り	凸面：暗灰色 凹面：暗灰色		釘穴有、凸凹両面にキラコ付着
	33	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	13.5 11.0 1.0	凸面 凹面	斜位のハケ、面取り 斜位のハケ	凸面：灰白色 凹面：灰白色		凸凹両面にキラコ付着
	34	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	10.6 14.7 0.9	凸面 凹面	斜位のハケ、面取り 斜位のハケ、面取り	凸面：灰色 凹面：灰色		凸凹両面にキラコ付着
	35	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	11.7 13.3 1.3	凸面 凹面	斜位のハケ後ナデ、面取り 斜位のハケ、面取り	凸面：灰色 凹面：灰色		凸凹両面にキラコ付着
	36	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	10.4 10.1 1.1	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ	凸面：黒褐色 凹面：黒褐色		凸凹両面にキラコ付着
	37	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	10.7 10.5 1.0	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ、面取り	凸面：灰色 凹面：灰色		凸凹両面にキラコ付着
	38	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	11.3 10.0 1.1	凸面 凹面	斜位のハケ、面取り 斜位のハケ、面取り	凸面：オリーブ黒色 凹面：オリーブ黒色		凸凹両面にキラコ付着
	39	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	5.7 5.3 1.2	凸面 凹面	横位のハケ 斜位のハケ、面取り	凸面：灰色 凹面：灰色		釘穴有
	40	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	8.2 14.8 1.1	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ	凸面：黒褐色 凹面：黄灰色		凸凹両面にキラコ付着
	41	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	13.4 8.7 1.2	凸面 凹面	斜位のハケ、面取り 斜位のハケ、面取り	凸面：黄灰色 凹面：にぶい黄橙色		凸凹両面にキラコ付着
8	42	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	16.0 20.5 1.1	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ	凸面：灰色 凹面：灰白色		凸凹両面にキラコ付着
	43	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	9.2 8.0 1.1	凸面 凹面	斜位のハケ 斜位のハケ	凸面：灰色 凹面：オリーブ黒色		凸凹両面にキラコ付着
	44	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	5.4 12.3 1.5	凸面 凹面	斜位のハケ後ナデ面取り 斜位のハケ後横位のハケ	凸面：灰色 凹面：灰色		凸凹両面にキラコ付着
	45	平瓦	残存長 残存幅 最大厚	10.4 13.1 1.3	凸面 凹面	ハケ 斜位のハケ、面取り	凸面：灰白色 凹面：灰白色		凸凹両面にキラコ付着
	46	棟瓦	残存長 残存幅 最大厚	8.2 15.4 1.4	凸面 凹面	横位のハケ後斜位のハケ 斜位のハケ	凸面：暗灰色 凹面：灰色		凸凹両面にキラコ付着
	47	棟瓦	残存長 残存幅 最大厚	18.2 17.6 1.6	凸面 凹面	斜位のハケ後ナデ 斜位のハケ後ナデ	凸面：灰黄色 凹面：灰白色		凸凹両面にキラコ付着

第３章　総括

第１節　総括

前述したように、小路遺跡は重要伝統的建造物群保存地区内にある。江戸期から現代に至るまでさまざまな変遷をたどってきた場所であり、各時代において地域の中心的な役割を担ってきた地区でもある。今回調査を行った場所については、屋敷群の一部と考えられ、検出された遺構については、屋敷周囲の構造物と考えられるが、調査面積も少なく、全体像が判明するまでにはいたっていない。出土遺物については、18世紀中ごろから19世紀中ごろにかけてのもので、今回図示できなかったものについてもおおむねその時期のものと考えられる。特徴的なものは、薄手の瓦である。調査当初は瓦質の甕などと考えていたが、調査中に立ち寄られた宮武氏（現佐賀大学）に、佐賀県内でも出土例のある瓦であると指摘いただいた。平瓦も丸瓦も厚さは1ｃｍほどで、いずれも当初の大きさを復元できる接合資料は見出せなかったが、第６図26・27などから、平瓦は、幅約30ｃｍ、長さは30ｃｍ以上の大きさと考えられる。近隣の屋敷群の屋根は、平瓦と丸瓦を組み合わせた本瓦葺であった可能性が考えられる。第８図47は、茅葺屋根の棟瓦と考えられる。厚みや大きさはかなり大きなものであろう。遺跡近隣に居住する方から寄贈いただいた瓦は、写真のとおり長さも幅も50ｃｍを超えるもので、佐賀県の茅葺屋根の棟瓦に使用されている特長的な瓦である。小路地区の屋敷群には、時期により差があると考えられるが、本瓦葺の建物と、茅葺屋根の建物があることが予想される。

今回の調査は、浄化槽の埋設範囲のみのわずかなものであったが、江戸期後半における小路地区武家町の様子の一端を垣間見ることができた。特徴的な薄手の瓦の出土は、当時の屋敷群の姿を復元する上で貴重な資料となった。（辻田）

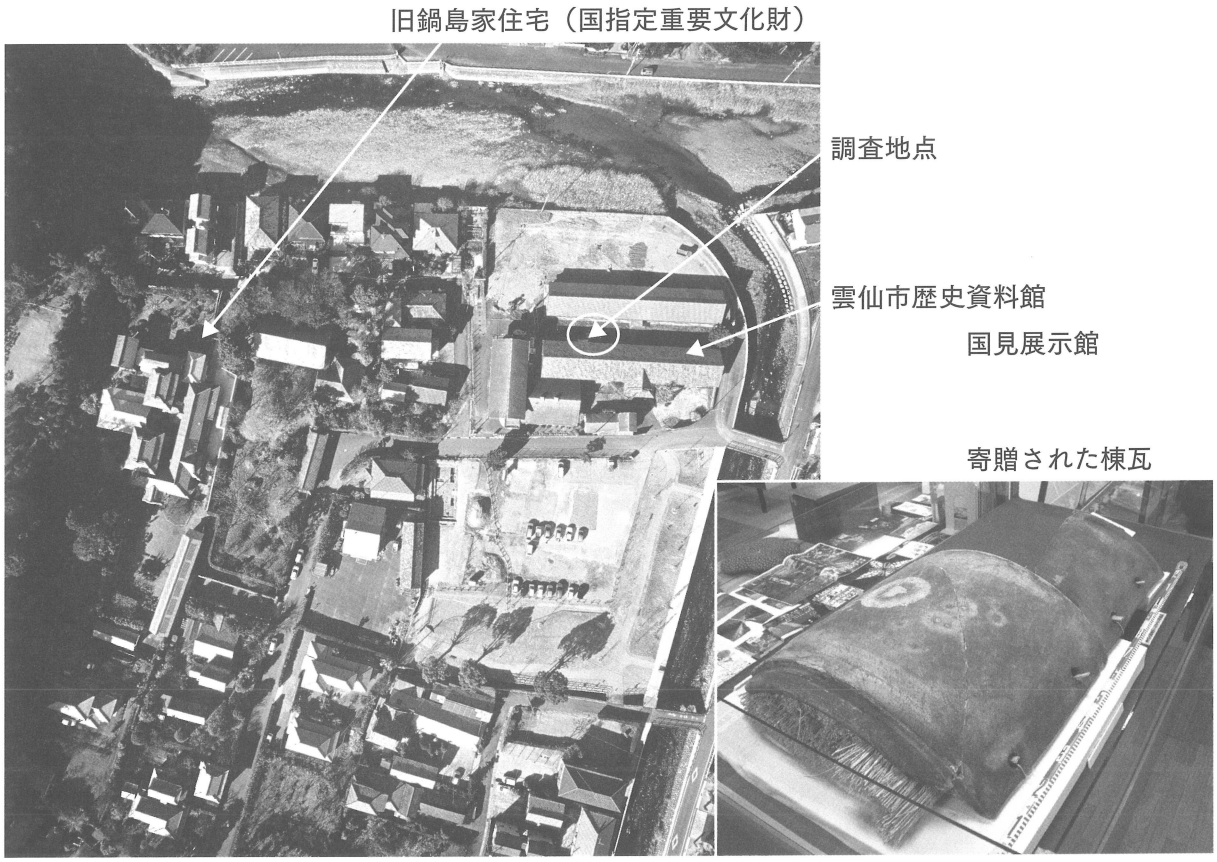
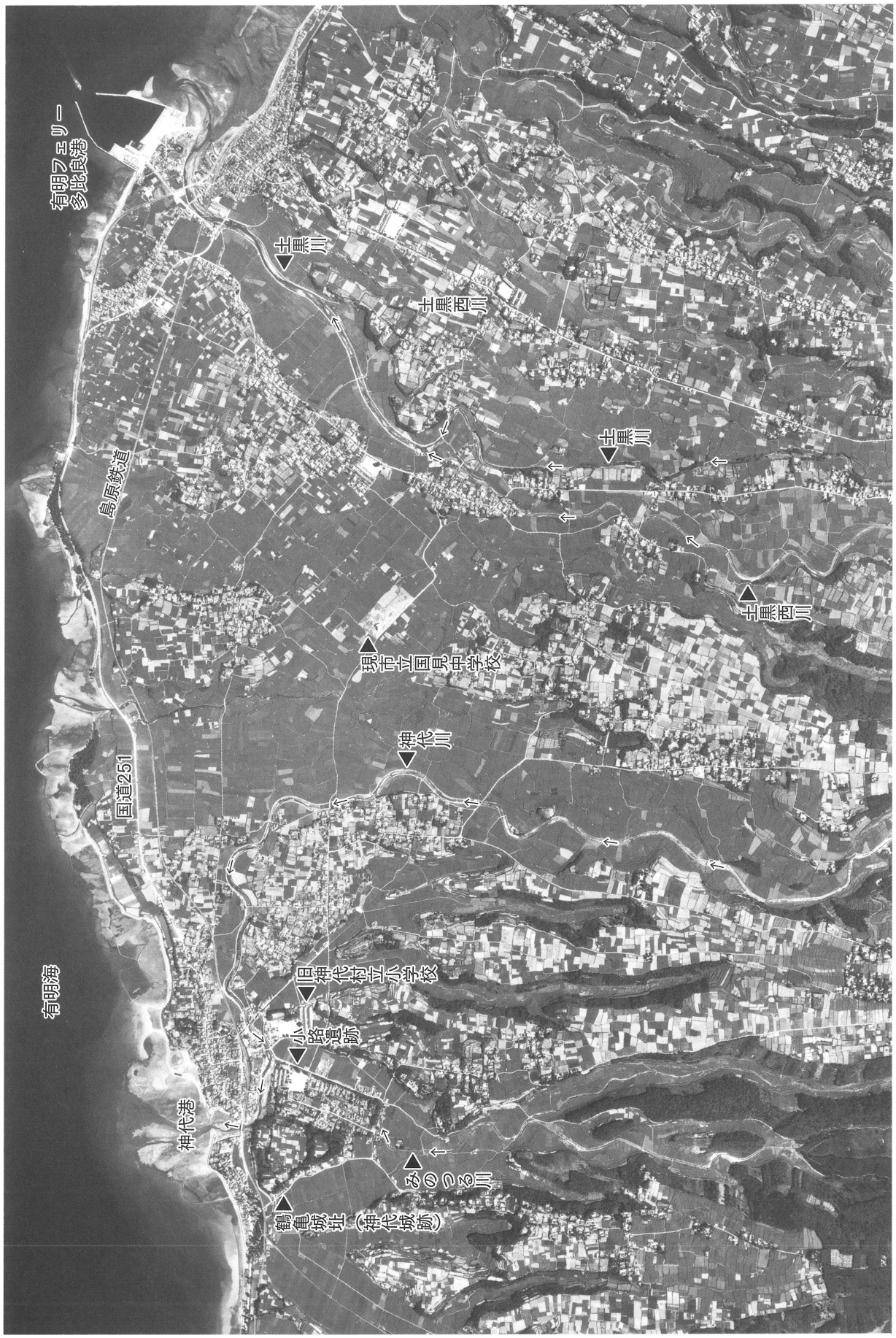


図　　版



遺跡上空写真（昭和36年 国土地理院）

図版2

調査風景

SK−1検出状況

SK−1検出状況

調査区拡張

SK−3検出状況

SK−3検出状況

SK−3砂礫除去状況

柱穴検出状況

柱穴完掘状況

石列検出状況

土層堆積状況

調査後の掘削

調査後の掘削

掘削状況

出土した瓦

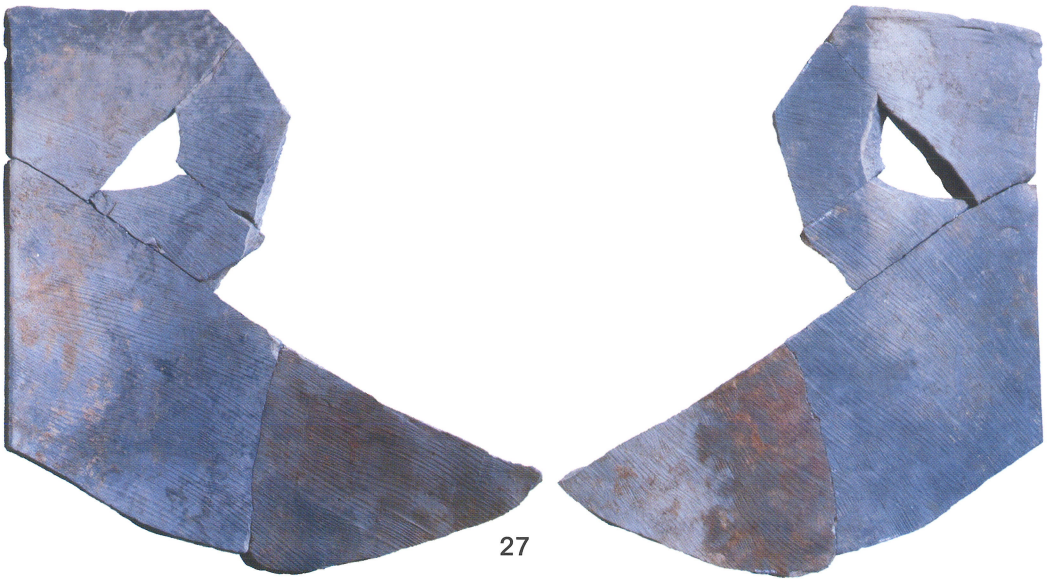
展示風景

図版4

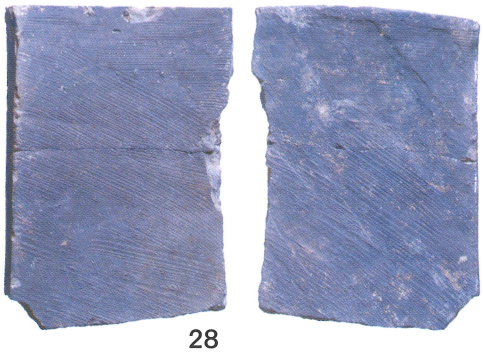
出土遺物①（土師器 1/3）

出土遺物②（陶磁器 1/3　丸瓦 1/4）

26



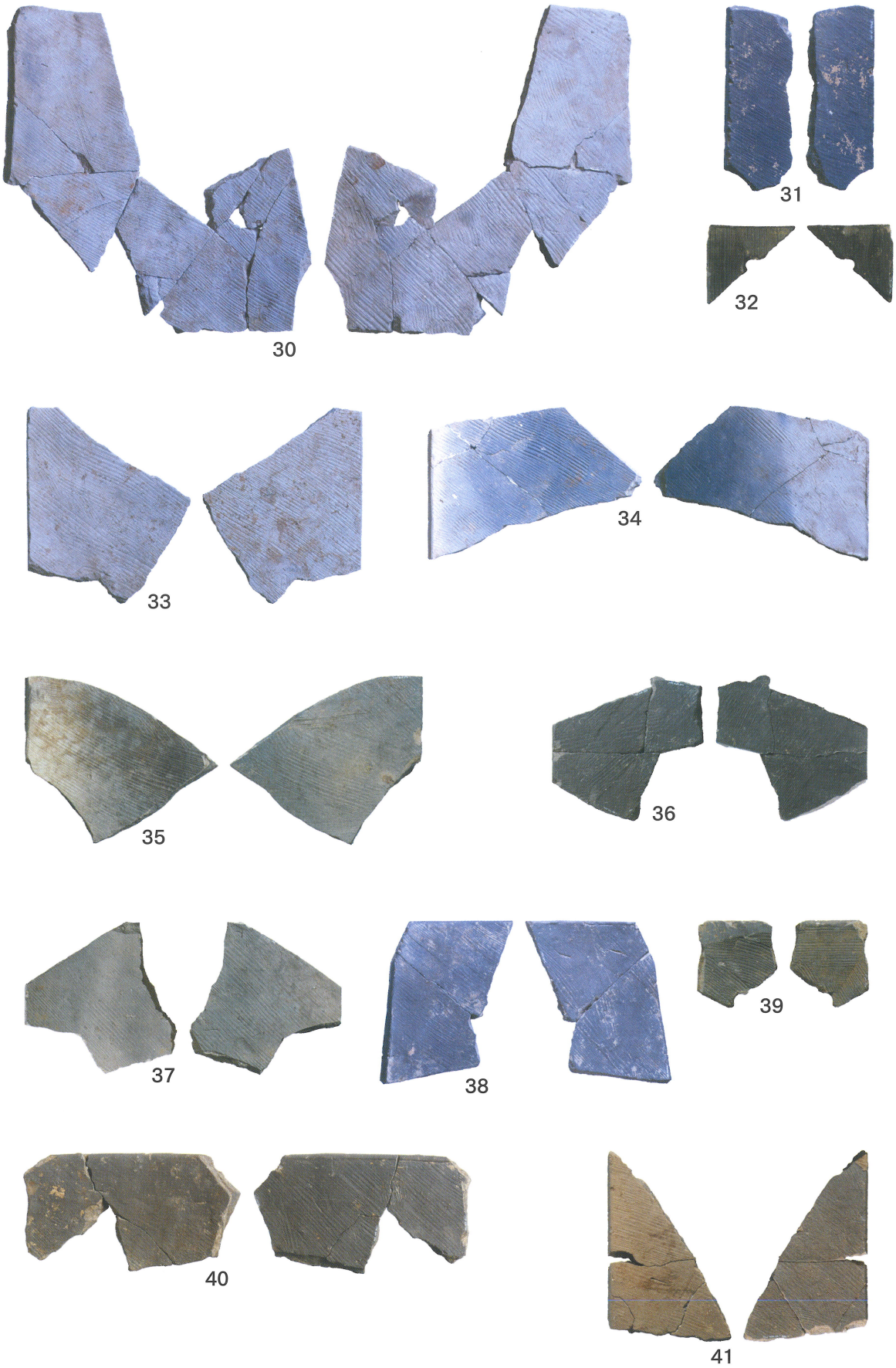
27



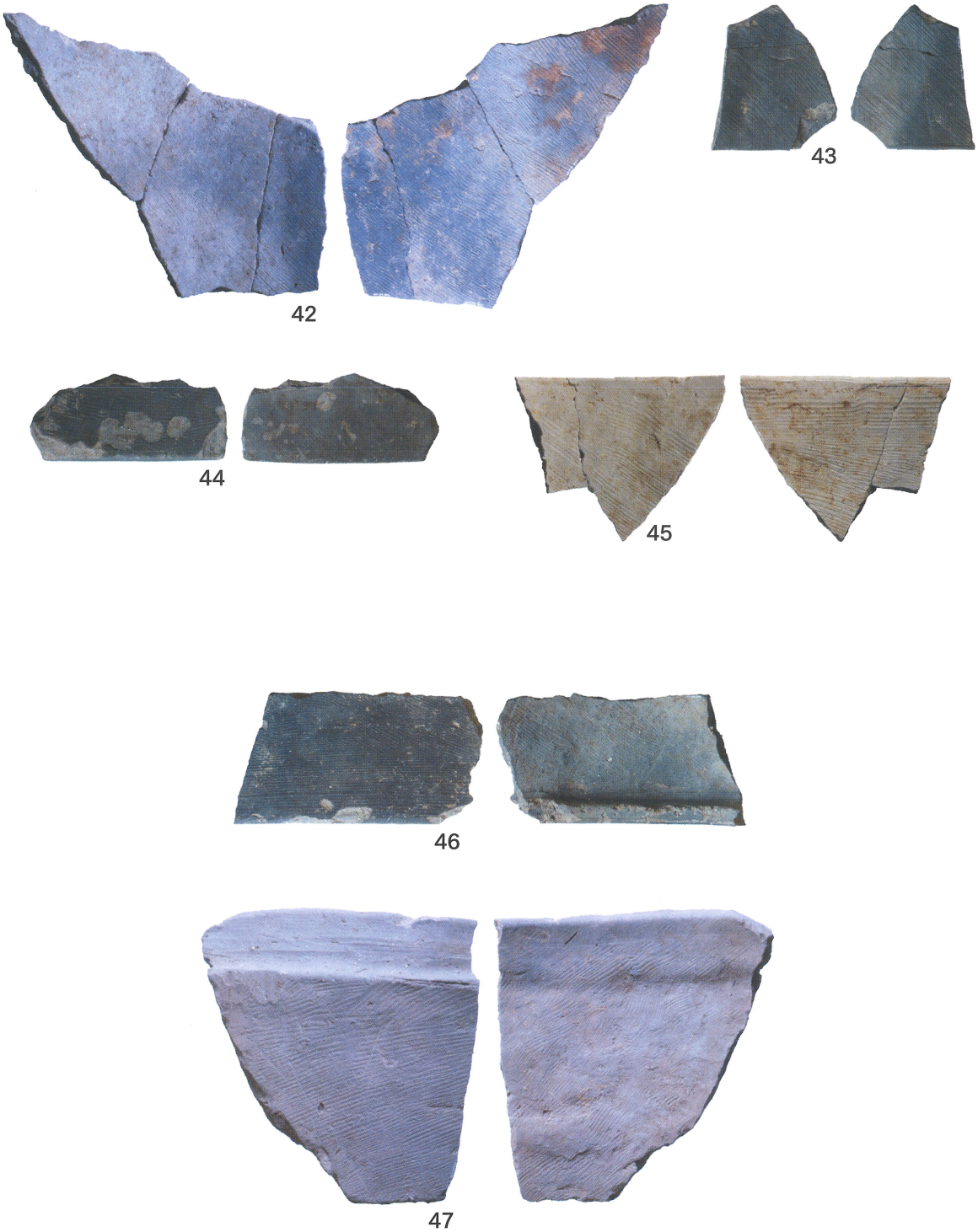
28

29

出土遺物③（平瓦 1/4）



出土遺物④（平瓦 1/4）



出土遺物⑤（平瓦・棟瓦 1/4）

報告書妙録

ふりがな	くうじいせき　つー
書名	小路遺跡　II
副書名	
巻次	
シリーズ名	雲仙市文化財調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	辻田　直人　　松崎　光伸
編集機関	雲仙市教育委員会
所在地	〒854－0492　長崎県雲仙市千々石町戊582番地　Tel 0957-37-3113　Fax 0957-37-3112
発行年月日	西暦：2018年3月23日　　和暦：平成30年3月23日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°　′　″	°　′　″			
小路遺跡（くうじいせき）	長崎県雲仙市（ながさきけんうんぜんし） 国見町（くにみちょう） 神代（こうじろ）	42213	86-68	32　° 52　′ 10　″	130　° 16　′ 7　″	2006/2/14 ～ 2006/3/2	18.00 ㎡	雲仙市歴史資料館国見展示館改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小路遺跡	遺物包含地	近世 近現代	石礫 土坑 ピット	近世陶磁器 近現代陶磁器	

雲仙市文化財調査報告書　第 17 集

小路遺跡　II

2018

発行　雲仙市教育委員会
長崎県雲仙市千々石町戊 582 番地
ＴＥＬ0957－37－3113

印刷　後藤印刷
雲仙市国見町神代戊 74-4 番地
ＴＥＬ0957－78－3602